ふぁんたじーDAYS
～天気と未来～

まりみた林檎

第一章　不思議な少女

「今日もまた雨か…。」

家で一番大きな窓に顔をべったりつけて私はぼそっとつぶやいた。

私の一番好きな季節は夏。だけど、その夏が終わろうとしている頃、私の町だけではないが、この頃雨続きだ。それも豪雨だから気分が下がってしまう。夏は好きだけれど雨は嫌いなんだよなぁ。

なんて思っていたら、日が差してきたみたいだ。また雨は降ると思うが、今のうちだ。私は広い芝生で寝たくて仕方なかった。晴れの日はいつもそうしていたから。だから出かける。雨が降るなら降ったでいい！私は傘も持たずに自分の町の図書館、知恵の和館の前にある文化センターの芝生へ向かっていった。芝生につくと私は地面を見つめた。雨が降ったからぐちゃぐちゃ。そこまで考えてなかった…。せっかく来たのに最悪じゃん！私は階段に座り込んでふと顔をあげてみた。すごい青空だ。さっきまでの雨が嘘みたいに。私はぼーっと空をみていた。何かいつもとは違うことが起きないかなと、妄想をしながら。

「ママ、何しているの？もうすぐ雨が降るけど大丈夫？」

え？私は我に返った。それは聞き覚えの無い声だった。声の主はきっと目の前だ。私は声の主の方へ顔を向けた。そこにいたのは小さな女の子だった。少女は私をまじまじと見つめ

て言った。
「あれ、ママじゃ…ない？」
深く頷いてみせた。でも私はママと呼ばれたことにはひっかかっていない。私も小さな頃よく間違えたものだ。私がひっかかったのは、もうすぐ雨が降ると言ったことだ。私はたずねた。
「ねえ、お嬢ちゃん。どうして雨が降るって思うの？」
そしたら彼女はこうやって答えた。
「思うんじゃないの。本当に降るんだよ。」
私には理解ができなかった。逆に彼女には私が理解できていないことが理解できていないようだった。とにかく名前を聞かなくては。まずは理解しあうにはそこからだ。私はお手本を見せるように自分から自己紹介して見せた。
「はじめまして。私、猫羽のどか。高校一年だよ。あなたは？」
「しずくの名前、あててみてよ！」
ははぁ、しずくちゃんね。一人称が自分の名前なのね。ちょこっと遊びに付き合ってあげますか！
「お姉ちゃん分かんないな～。答えちょうだい！答え。」

ふふふ。得意げな顔してる。この後の天気なんていってきたから、何かすごい子なのかなんて思っちゃったけど、そんなことないみたい。天気予報でもみたのかな。

「しずくの名前は朝比奈しずくだよ！しずくはね、六つなの。それにしてもしずくのママにそっくりだね。名前も一緒なんだよ。」

へえ、すごい奇跡だ。だから間違えたわけか。でも、こんな小さな子を一人で外に出すかな。母親はいないのかな。もしかしたら迷子？あー、気になることばかりだ。

「しずく、迷子なの。だからおうちに泊めてくれない？」

おっと、自分から言ってくれた。おうちに泊める？それって大丈夫なのかな…。

第二章　しずくの秘密

とりあえず、彼女を家へ招いてみることにした。家へ向かって歩いているときだった。途端に雨が降りだした。え？嘘、本当に雨が降ってきた！いや、そうだった、天気予報をみたんだっけ？ただの私の考えだが。それより早く帰らなくては。運悪く彼女も傘を持っていない。二人で家までかけていった。

家に到着し、テラスに入り込んで私は彼女の様子をうかがうため顔を覗き込んだ。あれ、どうしたんだろう。口をぽかーんとあけてきょとんとしている。

「どうしたの？」

私は思わず聞いてしまった。

「ここ、しずくのおうちみたい。そっくり。いや、全く一緒。」

表情を変えずにすらすらと話した。ふーん、すごいことがあるもんだ。私が玄関を開けると、母がたっていた。

「もう、こんな天気の日に出かけるなんて信じられない。」

こんな事を言いながらも心配してくれていたんだろうな。

「ばあば？」

おやおや、またしずくちゃんがおかしな事を言っている。彼女の祖母に私の母親が似てい

るのか。こんなすごいことが連続でおきるなんて…。
母には事情を説明し、彼女を私の部屋へ招いた。また不審な動きをしている。部屋中をきょろきょろしているのだ。
「ここ、しずくの部屋みたい…。」
どういうこと？私は彼女に説明してもらうことにした。
「ここのおうちがね、しずくのおうちにそっくりなんだよ。のどかお姉ちゃんのママはしずくのばあばにそっくり。あ、後ね言ってなかったんだけどね、しずくにはすごい力があるんだよ！」
いきなりここに来て衝撃の告白がきた。後半しか頭にはいらない。すごい力って何なんだろう。
「しずくの力はね、一日の天気をぴったりあてられるの。」
何それ？普通っていうか何というか。天気予報で分かるのでは？何て考えていたらテレビの声が耳にはいった。
「予想不可能の大雨です。今後もこのようなことがあるかもしれないので、みなさん要注意しましょう。」
予想不可？しずくちゃんはニタニタと笑っている。これはすごい力なのか…？

その日から彼女と一緒にくらすことになった。そして不思議なことが起こるようになった。買い物に行くにも欲しいものが一緒でとても気が合うのだ。二人とも丹那のバームクーヘンが好きだ。そしてときどきだがママと呼ばれた。天気も何時何分何秒とあててみせた事もあった。そして彼女は私が知っているものは知らず、私の知らないものを知っていた。そんな楽しい日々が続いてほしかった。確かに私は彼女とずっと暮らして楽しい。でも、彼女は辛そうだった。彼女の母親の捜索はかなり前から始まっていたが一ヶ月半、ずっと見つかっていない。母親がいないだなんて彼女にとっては信じられなかった。だから彼女はもう、私のことはずっとママと呼んでいる。そんなこんなのある日、彼女は言った。

「私、どこか違う世界から来たのかな…。しずくは函南町に住んでいるんだよ。ここのおうちはしずくのおうちのはずなのに…。」

私は考えた。彼女と私は共通点がありすぎる。もしかしたら彼女は未来からきて、私の子供だったら…？いや、何馬鹿なことを。そんなことあるはずがない。でも、もしそうだったら、早く帰してあげたい。

二人で文化センターの芝生へ行った。私が階段に座り込み上を向いた。同じことをすればできるかもしれないと考えたのだ。自分の未来を妄想した。そして顔をおろした。

「…。」

目の前にあるのは図書館だった。周りも見渡しても彼女はいなかった。無事に帰れたのかな…。すごい出来事なのにあっさりと終わってしまった。でもこうやってあっさり終わったのは彼女にとってはとても幸せなことだったのかもしれない。

第三章　再会と別れ

彼女と一緒にいたのはとても短い間だった。でも、部屋に一人でいるだけでいつもとは何か違う感じがした。今もし、目の前にしずくちゃんが現れたら…。でも彼女のことが好きなのなら本当に願うことではないのかもしれない。彼女は母親を恋しがっていたのだから。私はからっと晴れた青空の日に文化センターの芝生で寝そべった。雲がゆっくりと穏やかにながれてゆく。私はあの時を思い出したくなった。階段に座り込んで上を向き、彼女が目の前にいることを妄想した。そして顔をおろしてみた。

「やっぱりそう…か…。」

目の前には誰もいなかった。というか彼女は結局どこから来たんだろう。もし、本当に未来からだったら…。実際にあり得るのかな。

私は起き上がって、図書館にはいった。タイムスリップと検索してみる。実際に存在するのかどうか、そんなテーマの本はないのかもしれない…。そんなことを考えながら検索のボタンをタッチした。

「…ある！」

おっと、声を出してしまった。周りの方へ頭をさげた。ってそれどころじゃない！あったんだ！私は場所を確認し、そこへ向かった。私は本を手に取ってぱらぱらしてみた。うーん、

今では出来ないのか…。色々説明があるけど活字は読む気になれない。私は本を棚に戻した。
「わぁ、それ面白そう！ねえそれ一回貸してよ！」
「…！？」
無邪気な少女の声が聞こえた。私はそちらへ顔を向けた。しずくちゃんだ…！私は満面の笑みを浮かべた。周りはピリピリしているが。しずくちゃんはこっちをまじまじと見つめた。
「あ！のどかお姉ちゃん！」
ちょっとちょっと、静かに静かに！私はそう焦りながらもとても嬉しかった。一旦私たちは外に出た。
「しずくちゃん！」
「のどかお姉ちゃん！」
私たちは抱き着いた。彼女は母親と再会したから私のことはママと呼ばなくなっていた。
「どうしてここに来たの？」
私は一番気になる事をたずねた。
「せっかく来たけどもう会えない。あのときしっかりお別れ言えなかったから。ママが行って来いって。」
ママ？わざわざ出来事を話してくれたのか。お別れの為だけに？それってどういう…。

「のどかお姉ちゃん、さようなら。もうすぐ雨が降るから気を付けてね。」
雨が降る？私は階段に腰を掛け空をみた。雲一つない…。
「降りそうにないけど？」
あれ？いない…。そう思った瞬間、雨が降りだした。

最終章　のどかとしずくの繋がり

あんな不思議な出来事から十年がたった。私はもう結婚し、名前は朝比奈のどかになった。そして子供もいる。その子供を命名したのは旦那だ。名前を聞いたときはびっくりしたなあ。

そろそろかな。私は文化センターの芝生の階段に座り込んで空を見上げて娘に言った。

「今から雨が降るって、これから会うママに伝えてきてあげて。」

娘が私の前に駆け寄ってきた。何を言っているのか分かっていなさそうだ。

「いってらっしゃい。しずく。」

ふぁんたじーDAYS（デイズ）　～天気（てんき）と未来（みらい）～

2024 年 10 月 26 日　発行

著者　まりみた林檎（りんご）

令和 6 年度 函南町立図書館 8 月～11 月ＹＡ展示・企画冊子
編集・製本・発行　函南町教育委員会生涯学習課（函南町立図書館）
　電話番号　055-979-8700
　住所　419-0122　静岡県田方郡函南町上沢 107 番地の 1

当作品について転載・複製・複写・翻訳を著作者の許可なしに行うことを固く禁じます。
（著作権法上での例外を除く。）また、個人や家庭内の利用であっても、代行業者等の
第三者に依頼して無断でスキャン及びデジタル化することはできません。
作品の著作権は著作者に帰属しますが、函南町立図書館は作品を永続的に無償で使える
ものとします（主に公開にあたっての編集、印刷、配布、掲載に関すること）。
ただし、当館は著作者の創作性を重視し、作品内容には関与しないものとします。
また、すべての文章は原文のままとし、当館で校正・校閲作業は行っておりません。

雨上がりの日、高校生の猫羽のどかが出会ったのは天気を当てられる少女・しずく。不思議と共通点を多く持つ彼女と毎日を楽しく過ごしていたが、突然の別れがやってきてしまう。少女たちをめぐる、運命のファンタジーSF。